

「アイアイハウスを支える会」 2013年度総会が開催されました

2013年4月20日(土)生活介護事業所アイアイハウスにおいて、京都府立盲学校非常勤講師でアイアイハウスを支える会会長の岸博実氏を迎え、講演会「時を超えてつながる 京都盲唖院とアイアイハウス」を開催し、貴重なお話をさせていただきました。その後、総会で2012年度事業報告・決算報告、2013年度事業計画・予算・新役員が承認されました。本年度もどうぞ皆様のご支援・ご協力をお願い申し上げます。

<講演を聴いて>

上京アイアイハウスからほど近い場所にあり、支える会が毎年秋にアイアイハウスのある学区で開かれる「たいけんカーニバル」に出店して仲間の自主製品などを販売している元待賢小学校は、日本最初の盲唖院発祥の地であることを知りました。また創立されたばかりの京都盲唖院は上京区の今は京都第2日赤病院の地にあり、通りを挟んで盲部と聾唖部に分かれ、後に盲部は千本北大路(とうふ屋あい愛の近く)へ、聾唖部は御室へと移ったとのこと。最初に「1878年の京都盲唖院開設から100年後の1978年にアイアイハウスの設立準備会が発足したことに、偶然かもしれないが何か感じるものがある」と言われましたが、お話が進むにつれ、まさに時を超えてつながっているのだと実感しました。

京都盲唖院の古河太四郎初代院長は、点字のない時代に様々な工夫をしてひとりひとりに寄り添いながら、文字の学習に尽力されました。また京都市内での通学保障のため人力車を20数台導入したり(当時四条大橋が鉄製になったばかりで人力車は通行料を支払わねばならなかったが、盲唖院生の乗る人力車には^{のぼりはた}の旗をつけて無料にした)、遠方から入院希望者がふえたことで寄宿舎をつくられたそうです。アイアイハウスでは今春から車両をふやして仲間全員の送迎が始まり、特に通学保障の人力車のことは身近に感じられました。

2代目の鳥居嘉三郎院長はその後を引き継ぎ、運営費用を工面するため、おにぎりを腰につけ市内を歩きまわられたというエピソードは感動的でした。当時の様子を資料(下記の写真)でわかりやすく紹介いただきました。

昭和48年からの盲学校高等部に重複障害の生徒受け入れ後、様々な取り組みのなかで「卒業後どうするのか」という声があがり、教職員や保護者、多くの方々の努力によりそのねがいが実を結び、やがてアイアイハウス設立へと進んでいきました。現在の施設に掲げられている「法人理念・基本方針」は設立当初からのこうした流れをもとに作成されたものです。今100年余の時がたちましたが、色あせない確かなものにふれた学び多い講演会でした。

(事務局長 佐々木美也子)



人力車にはためいた
「盲唖院」の^{のぼりはた}旗



瓦文字「二」
(粘土での模写)



木刻凸字「ひ」
(裏面は凹)